

14 去勢抵抗性前立腺癌、治療薬副作用に対して補中益気湯を内服継続できた1例 (当院での臨床研究の結果を含めて)

那覇市立病院 泌尿器科外科

玉城 光由

【緒言】当院では臨床研究で泌尿器科領域における薬剤の副作用に対して補中益気湯の内服の有無で副作用の軽減、患者のQOLの上昇が期待できるか検討している。その中の1症例であるが去勢抵抗性前立腺癌、治療薬副作用に対して補中益気湯を長期内服可能であった症例を提示する。【症例】83歳男性2015年6月に前立腺癌と診断iPSA157.58GS5+3T>2N1M1骨盤～腹部リンパ節多発転移認めホルモン療法開始(ビカルタミド+デガレリクス)となった。2017年7月にフルタミドに2018年8月エンザルタミドに変更となった。2019年4月エンザルタミドの食欲不振、倦怠感に対して補中益気湯開始。2021年1月ドセタキセル、2022年7月カバジタキセルに変更し現在は化学療法中である。【評価方法】補中益気湯投与3ヶ月前より1回/月の採血、アンケートにて評価した。採血の項目は当症例ではAlb、PreAlb、PSAで倦怠感の評価についてはCancerFatigueScale(身体的、精神的、認知的、総合的倦怠感を点数化)のアンケートを使用し検討した。【結果】採血の結果でアルブミン値はほとんど変化ないがプレアルブミンについては内服開始後上昇傾向を示した。倦怠感の評価については身体的、精神的、総合的倦怠感の内服開始後より緩やかに改善しているが認知的倦怠感については増悪傾向であった。【考察】以前より補中益気湯内服後プレアルブミンが上昇し栄養状態改善の可能性があるとの報告があり当症例でも同様の結果となった。現在まで3年半内服継続しその間化学療法に移行してもプレアルブミン値の上下はあるが投与前の値より高い値で経過している。倦怠感についても緩やかな改善を示しており、補中益気湯は去勢抵抗性前立腺癌、治療薬の副作用である低栄養、倦怠感に有効であると思われる。